

# 「Danish Thinking」

医療福祉ジャーナリズム分野修士 2年

藤原なおみ

## ため息とともに

私はカズさん、寺田和弘先生を EMA 日本の活動を通して知っている。

Equal Marriage Alliance。2020年の東京オリンピックまでに

日本も同性婚を認められる国に。その中心にカズさんがいる。

この講義を受ける前にお目にかかったのは、えにしの手帳

(福祉と医療・現場と政策の新たなえにしを結ぶ会)を入れても3回ほどかもしれない。

それでも何だかとてもカズさんをよく知っているような気がしていた。

人間とはずいぶん都合のよい考え方をするものである。

今回の講義は、私の知らないデンマーク。そして、カズさんとの新しい出会いであった。

みんなが心からため息をついたように、世界一幸せな国というその内容に、

少し日にちがたった今も気持ちがザワザワとしている。

## 『コペンハーゲンの街かどから』

これはカズさんの書かれた本のタイトル。

「デンマークの何がどうだからしあわせだ、というより、

実感として、みんながしあわせそうだと思うのだ」というその「実感」を、

ご自身のあたたかな文章が補ってくれる。

法律、福祉、教育、育児。デンマークを切り刻んでみても、何故しあわせなのかの答えは、

そのすべて、ということになるだろう。

小さな王国の大きなしあわせ。

一人一人がしあわせだと感じられるからこそ、他人のことを考えられる。

そういう国なのだ。

勉強したい人が勉強したいときに勉強できる国。

徴兵制度がある国。そして、「国民一人ひとりが自ら稼いだ金額の1%以上を

他国への援助に使っている国」である。ダントツ。そのとき日本はたった0.35%だ。

(主要国の国民一人当たりのODA額 1999年)

権利も義務も、考えることを忘れてしまったような私の日々。

それを穏やかだなどと勘違いしている私自身を思った。

しかし、私が、医療福祉という分野を、ジャーナリズムを通して学んでいる理由の一つに、

一人では生きることができない孫を残していかなければならない、

日本という社会への不安があった。

このままでいいのか？何が不安なのか？どこをどうすればいいのか？

私にできることは何なのかを考えたいという思いがある。

それはいつも低い音で、心の奥の奥で鳴っている。

障害と社会という直接的な対決、障害者の権利、保障の充実、介助力、施設力、福祉力…

さまざまなキーワードがある。法制度のますますの充実も必要だが。

そうなのだ、一人ひとりの考え方なのだ。

### しあわせは歩いてこない。

1960年代からの、女性の社会進出が生みだしてゆくあらゆる福祉サービス。

それが今のデンマークをつくっている。

デンマークが育てたのは、サービスやシステムではなく「人」。

「市民を受け身の存在にするのではなく、公的システムのコントロールや管理のかわりに、

交流をするということ。お互いに対する敬意、尊重の気持ちを大切にすること」と言う、

アンデルセン・元デンマーク社会大臣の言葉に出会った。（1998年朝日新聞フォーラム 21 参照）

電車で座れない人が一人でもいることを不平等と考える国。

個人主義のようであるが自分勝手とは違う国。

「がまんするということは、相手にがまんをさせること。

主張することは、相手の主張も聴くということ」。

カズさんはそう教えてくれた。

「僕は、日本でも生きやすいように生きている」。それは教養や知性、実力、

ご自身が持つ生きる力そのもの。そして、その先に、EMA 日本の活動がある。

大変なことを動かしている。でも、カズさんには大上段に構えたところがないように思う。

「特別な権利が欲しいのではない。みんなが持っているものを持つのが当然だ」と。

明確と、達観と、ブレない原動力と、やさしさ。そんな風を感じた。

全米で同性婚を認めさせた弁護士エバン・ウォルフソンさんは、人の心を動かすためにはストーリーが必要。エンジン、原動力、推進力、伝えること。と大切なことを教えてくれたが、まさにそのすべてを動かしている。

### 不思議の国のポジフィルム

私は、子供のとき不思議な映写機を持っていた。世界各国 100 枚以上はあったように思うのだが、美しい風景のポジフィルムを一枚ずつセットして、その映写機の中に映し出してゆく。

大きなスクリーンに投影するのではなく、その機械の中で見る。

そのせいだろうか、自分の記憶の中にある風景を見ているような、こことそこと、今と未来と過去の境界線があいまいになっていくような、自分だけの風景、万華鏡のような感覚だった。

一人でいる時間が多かった私は、その不思議な映写機に夢中になった。

カシャッ、カシャッ、一枚ずつ目の前に現れる現実には見たことのない風景の中で、ずいぶん長い時間を過ごした。パリの凱旋門、エッフェル塔、自由の女神、バッキンガム宮殿、百万ドルの夜景。デンマークは馬車と衛兵だったような…おとぎの国のようなかわいい家並み…うーん、記憶はあやしい。

講義はまるであの映写機だった。

デンマークのしあわせの風景がカシャッ、カシャッと映し出されてゆく。

石畳の街なみ、チボリ公園、人々の笑顔、おじいちゃんも子供たちも、

大きな双子用のベビーカーも、みんなが共有する街の空気、匂い。

デンマークに赴任して初めて髪を切ってもらったときの「**Husband!**」のエピソード。

アパートメントの大家さんの部屋の男性のポスター。

その一つひとつを楽しんでいるカズさん。風景はしあわせに満ちていた。

こんなに素敵なお国。それを伝える講義だったのだろうか。

いや、デンマークを知ることで、日本を、そして私自身を考える時間をくれたのだ。

そして、EMA 日本のカズさんの思いも、もう一歩わかったような気がした。

「デンマークを赴任地に選んだのは、同性婚を認めている国だからではないけれど、結果的に、そういう空気感を居心地がいいと感じたということだと思う」と話してくれた。

同性婚が認められる、日本になったなら、そこから一人ひとりが変わっていくだろう。

誰かとしあわせに生きるということとはどういうことなのかを

みんなが真正面から考えはじめるかもしれない。

企業もまた変わるだろう。

障害を持つ人をめぐる環境も変わっていくに違いない。

日本にとって、とても大きな一歩になるのだと思う。

しあわせって一人ではなれないんだな—ということや、

みんながしあわせであることが、しあわせなんだな—ということ。

「だれもが」という言葉を講義の中で何度も聞いた。

私の権利と、私の義務。単なる個人としての私を超えて、

この社会に責任をもつ市民としての私を考え直してみたい。

皆でこの社会を分けあっている一人として、あらためて見直してみる。

## 風に向かって

豊洲は風の街。そして、今日の豊洲は、さらに強風が吹いていた。

向かい風に抗って運河沿いを進む孫の車椅子は、可笑しくなるほど押し戻される。

でも、おでこに吹きつける強い風を楽しむように、孫は声をだして笑う。

私もいっしょに笑う。そんなとき、この上ないしあわせを感じる。

こんな風くらい、僕はちっともこわくない。前に進もう。

そう言ってくれているようだ。勇気を後押ししてくれる。

何かに抗っているときの方が力がでるもの。

そんな話をカズさんとしたことを思い出した。

貴重な講義、ありがとうございました。  
講義も、講義後も、ありがとうございました。

息苦しいのであれば風を入れればいい。  
窓を開けることかもしれないし、外に出ることかもしれない。  
私はどちらをすることも忘れていたようです。  
そのことに気づいた大切な時間でした。

ありがとうございました。

藤原なおみ